

創造と構築：研究成果と今後の課題

著者	小西 潤子
雑誌名	技を媒介とした学びに熱中する子どもの育成プログラム；2006
ページ	3-4
発行年	2006-03
出版者	静岡大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/10297/7133

創造と構築

研究成果と今後の課題

小西 潤子

本プロジェクト（以下、「技プロ」と称す）における技へのさまざまなアプローチについて、「創造」を横軸、「構築」を縦軸にとった図によって整理してみるのもひとつの方法である。「石の上にも三年」という言葉に示されるように、これまで一般に技は構築性の高さによって評価されてきた傾向がある。確かに、積み重ねによって築きあげられた巧みの力は魅力的であるが、それだけでは閉じた体系で終わってしまう。特に、技を教育に持ち込む場合には、子どもの関心や学校現場の事情に合わせて変換するだけの創造性が大きく問われる。図1では、座標上で左から右に向かうほど創造性が高く、下から上に向かうほど構築性が高いものとした。したがって、目標となるのは、第1象限における創造性と構築性の度合いがそれぞれ最も高い地点ということになる。そして、そこにあてはまるのが技の「実践」である。

では、スタート地点である第3象限の創造性と構築性の最も低い箇所には、何があてはまるであろうか？ここでは、技の「知識」をおいてみた。いかなる技であれ、先人が築きあげた知識の上に成り立っているはずである。それは、学問的知識の場合も経験知の場合もある。知識に創造性を加えながら構築することを技の「習得」とし、第2象限に位置づけた。習得度は、言うまでもなく低いものから高いものまで幅が広いと、大きな円で示した。知識→習得は、技に限らずあらゆる学習の基本であるが、「技プロ」の独自性は習得した技を「実践」するところにある。いずれを強調するかはまちまちではあっても、本報告書に掲載された研究の多くが、基本的には知識→習得→実践のプロセスを追ったものと見なせるであろう。

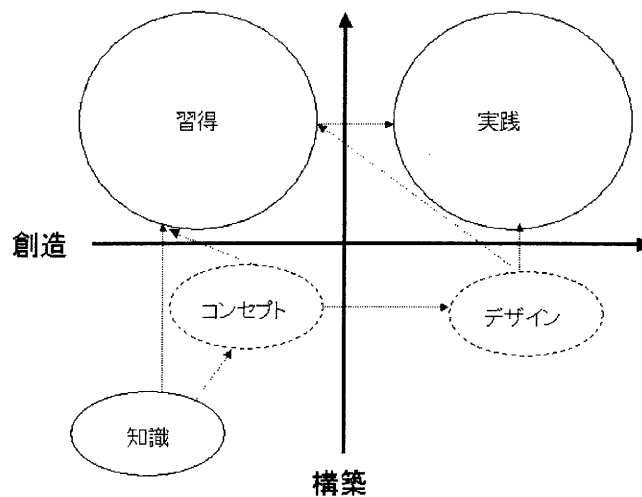


図1 技の体系

また、「知識」から創造性が高い新たな「コンセプト」が生み出されることもある。その場合、知識→コンセプト→習得→実践のプロセスを追った亜種だといえる。さらに、コンセプトに創造性を加え、デザインしていくこともできる。たとえば、杉山による研究報告は、知識→コンセプト→デザインの構想を明らかにし、実践へと向かうものである。コンセプト→デザインのプロセスは、実践の場からは見えにくいのだが、創造性を高めて奥行きのある実践に結びつけるためには大変重要である。ただし、このプロセスが実践とどのように関連し、どのように活かされるかを明確にしておく必要がある。

今後の課題として、1つには教科横断的な活動内容をどのようにして実現していくかがあげられる。可能性としては、他教科で援用できる教材作りがある。具体的には、技術科で楽器を製作し、音楽科で演奏を習得することなどが考えられる。このような場合、知識→習得→実践を複数の教科で平行して相互に横断するだけではなく、コンセプト→デザインのプロセスを当該教科間で共有しておく必要があるだろう。というのは、教科横断的な活動のメリットはその創造性の高さにあると思われるからである。

さらにいえば、それぞれの研究活動が技プロの中でどの位置を占めるのかを相互に理解しながら、全体の見取り図を作ることも大きな課題である。異なる学問的背景をもった研究者からなるプロジェクトの場合、共通認識をもつことは大変難しい。だからといって、プロジェクト研究のために、異なる分野に関する高度な専門性を基礎から身につけることは不可能といってよいだろう。その解決策の1案として、共通のテーマをもった教科横断的なワークショップを企画運営することが考えられる。技を媒介とする実践目標を共有することで、相互理解が深まるのではないだろうか。

また、技プロメンバーをいかにして保持ないし拡張していくかも、今後の課題である。今年度の技プロメンバーは、松永・小西・山下の呼びかけ人が個人的にあたることで募った。この方法でよかったのかどうか議論し、持続可能なプロジェクト活動を展開していきたいと考えている。